

渋沢栄一著「論語と算盤(そろばん)」大和出版 1992年4月15日刊を読む

人生は努力にあり

1. (1) 予は本年(大正2年)もはや74歳の老人である。それ故、数年来なるべく雑務を避ける方針を取っているが、ただし全然閑散の身となることが出来ず、まだ自分の立てた銀行だけは依然、その世話をしているという次第で、老いてもやっぱり活動しておるのである。
 - (2) すべて人は老年となく青年となく、勉強の心を失ってしまえば、その人は到底進歩発達するものではない。
 - (3) 予は平生自ら勉強家のつもりでいるが、実際一日といえども職務を怠るということをせぬ。毎朝7時少し前に起床して、来訪者に面会するように努めている。いかに多数でも時間の許す限り、たいていは面会することになっている。
2. (1) 予の如き70歳以上の老境に入っても、なお且つかくの如く怠ることをせぬのであるから、若い人々は大いに勉強して貰わねばならぬ。
 - (2) 怠惰はどこまでも怠惰に終るものであって、決して怠惰から好結果が生れることは断じてない。即ち座っていれば立ち働くより楽なようであるが、久しきにわたると膝が痛んで来る。それで寝転ぶと楽であろうと思うが、これも久しきにわたると腰が痛み出す。怠惰の結果はやっぱり怠惰で、それがますますはなはだしくなるくらいが落ちである。
 - (3) 故に人は良き習慣を造らねばならぬ。即ち勤務努力の習慣を得るようにせねばならぬ。
3. (1) 世人はよく智力を進めねばならぬとか、時勢を解せねばならぬとかいうが、なるほどこれは必要なことで、時を知り事を選ぶ上には、智力を進めること、即ち学問を修むる必要がある。とはいうものの、智力いかに十分であっても、これを働かさねば何の役にも立たない。そこで、これを働かせるということは、即ち勉強してこれを行うことであって、この勉強が伴わぬと、百千の智もなんら活用をなさぬ。しかしてその勉強も、ただ一時の勉強では十分でない。終身勉強して初めて満足するものである。
 - (2) およそ勉強心の強い国ほど国力が発展している。これに反して、怠惰国ほどその国は衰弱している。故に、一人勉強して一郷きょうその美風に薫じ、一郷勉強して一国その美風に化し、一国勉強して天下びぜん靡然としてこれに倣うならというように、各自はただに一人の為のみでなく、一郷一国ないし天下のために、十分勉強の心がけが大切である。

4 . (1) 人の世に成功するの要素として、智の必要なること、即ち学問の必要なることは勿論であるが、それのみを以てただちに成功し得るものと思うは大なる誤解である。

(2) 論語に『子路曰く、民人あり、社^{しゃ} 稷^{しやく}あり、何ぞ必ずしも書を読み、しかる後に学ぶとせん』とある。これは孔子の門人の子路の言である。すると孔子は『この故にかの^{ねいしや} 佞^{にく}者を悪む』と答えられた。この意は『口ばかりで、事実行われなくては駄目である』ということである。予はこの子路の言をよしと思っている。

(3) されば机上の読書のみを学問と思うのははなはだ不可のことである。

5 . (1) 要するに、ことは平生にある。

(2) これを例すると、医師と病人との関係の如きものである。平常衛生のことに注意を怠っていて、イザ病氣という時に医家の門に駆けつけるというようなもので、医者は病人を治すが職務であるから、何時でも治してくれると思うては大違いである。医家は必ず平常の衛生を勧めるに相違ない。

(3) 故に予はすべての人に、不断の勉強を望むと同時に、事物に対する平生の注意を怠らぬように心がくることを説きたいと思うのである。

P95 ~ 97

[コメント]

日本の資本主義の原点をつくりあげた渋沢栄一先生の努力論。「不断の勉強」と「事物に対する平生の注意」、つまり現実を直視することの大切さを説いたものとして高く評価される。折にふれ、たえず参照されるべき日本人の古典、必読書。

- 2009年8月29日林明夫記 -